The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

〈無量寿経〉における阿弥陀仏国土観の変遷
——仏国土の名称を中心として——

壬　生　泰　紀

0．問題の所在

〈無量寿経〉[1] において，阿弥陀仏の国土は，その描写が経典の大半を占めており，中心テーマの1つといえる．阿弥陀仏の国土は，比較的成立が新しい〈無量寿経〉梵本において，主として“buddhakṣetra（仏国土）”と“Sukhāvatī lokadhātu（極楽世界）”との2種の名称で示されている．一方，最初期成立の『大阿弥陀経』では，その国土は，基本的に「阿彌陀佛國」でもって指し示され，Sukhāvatī に対応する音写「須摩題」でもって指し示される箇所は1例のみである．

従来の研究では，阿弥陀仏国土観の変遷を論ずる場合，〈無量寿経〉諸本におけるその描写の相違に主眼が置かれてきており，管見の限り，その国土を指し示す名称に対する検討を加えたものはない[2]．そこで，本稿では，〈無量寿経〉諸本に見られる阿弥陀仏の国土の名称，および Sukhāvatī に関する記述に重点を置いて検討する．それによって，〈無量寿経〉における阿弥陀仏国土観の変遷に新たな視座を与えることを本稿の目途とする．

1．阿弥陀仏の国土の名称

現存最古訳の『大阿弥陀経』では，阿弥陀仏の国土を指し示す語として，buddhakṣetra 系統[3] の語がテキスト全体に亘って頻出し，特に「阿彌陀佛國〔土〕(*Amitābha-buddhakṣetra)」は最も多く，全用例の半数以上を占めている．一方で，Sukhāvatī 系統[4] の語は，中期インド語に属するガンダーラ語の*Suhāmatī あるいは*Su'āmatī（<Sukhāvatī）の音写とされる「須摩題」[5] の1例のみが確認できる．この傾向は，基本的に『平等覚経』に踏襲される．ただし，『平等覚経』より2つの偈頌が現れ，その内，「東方偈」には，Sukhāvatī 系統の語が3例うかがえる[6]．上記2本のような傾向は，『無量寿経』より変化が見られ始める．『無量寿経』では，buddhakṣetra 系統の語が全用例のほとんどを占めているものの，「仏名＋国

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

〔土〕」という用例は大幅に減少する．一方で，Sukhāvatī 系統の語の用例は僅かだが増える．さらに，後期成立の『如来会』・『荘厳経』・梵本・蔵訳では，『無量寿経』のような傾向が顕著になる．本願の箇所を除けば，『如来会』・『荘厳経』において，buddhakṣetra と Sukhāvatī との２系統の語は，阿弥陀仏の国土を指し示す際に併用され，そして，梵本・蔵訳では，その用例数が逆転する．

２．〈無量寿経〉所説の Sukhāvatī

２．１．現在西方　〈無量寿経〉には，共通して，「阿弥陀仏の国土＝Sukhāvatī」と示される箇所が存在する．『大阿弥陀経』には，以下のように記されている．

> 佛告阿難：「阿彌陀作佛已來，凡十小劫．所居國土名須摩題，正在西方，去是閻浮提地界，千億萬須彌山佛國．」（T.12, 303b17–19）

ここでは，まず，法蔵菩薩が阿弥陀仏になってから十小カルパになること（十劫成仏）が説かれ，次に，かの仏がいる場所として西方の須摩題（現在西方）が示される．『平等覚経』（T.12, 282c28–283a2）も同様である．一方，残りの諸本は，その様相を異にする．梵本には，

> bhagavān āha: “na khalu punar Ānanda sa tathāgato 'tīto nānāgataḥ, api tv eva sa tathāgato 'nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbuddha etarhi tiṣṭhati dhriyate yāpayati dharmaṃ ca deśayati. paścimāyāṃ diśītaḥ koṭīnayutaśatasahasratame buddhakṣetre **Sukhāvatyāṃ lokadhātāv** Amitābho nāma tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho 'parimāṇair bodhisattvaiḥ parivṛtaḥ puraskṛto 'nantaiḥ śrāvakair anantyā buddhakṣetrasaṃpadā samanvāgataḥ.” (L.Sukh, 31.19–32.3)
>
> 世尊は言われた．「実に，アーナンダよ！かの如来は過ぎ去ったのでもなく，いまだ来られないのでもない．そうではなく，かの如来は，無上なる正等覚をすでにさとって，いま，住し，とどまり，時を過ごし，そして，法を説いておられる．ここより，西方に，十万・百万・千万番目の仏国土である**極楽世界**において，アミターバと名づける如来・応供・正等覚者が，無限量の菩薩や無限の声聞たちによって取り囲まれ，恭敬され，無限の仏国土の成就をそなえておられる．」

と，『大阿弥陀経』と同様，阿弥陀仏の「現在西方」について述べられるが，かかる記述は，阿難の問いに対する釈尊の答えという問答形式となって現れる．これと同趣旨の記述は，他の４本にも存在する[7]．さらに，『大阿弥陀経』と『平等覚経』に見られる「十劫成仏」の記述は，他の５本では異なる位置に現れ[8]，〈無量寿経〉諸本で異同がうかがえる．

２．２．Sukhāvatī と呼ばれる所以　『無量寿経』には，種々の善い音声が挙げられ，三悪道という苦難の名前がなく，ただ快楽の音声のみがあることが述べられた後に，「是故其國名曰極樂」（T.12, 271b16–25）とあり，阿弥陀仏の国土が Sukhāvatī と

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

呼ばれる所以（Sukhāvatī の所以）が示されている．『如来会』（T.11, 97a8–24）・梵本（L.Sukh, 41.11–42.13）・蔵訳（Tib.L.Sukh, 128.8–132.5）にも，かかる一連の記述と同趣旨の文があり，それに加えて，安楽の原因についても言及されている[9]．一方，『大阿弥陀経』と『平等覚経』には，かかる一連の記述は見られない．また，梵本（L. Sukh, 45.20–46.3）と蔵訳（Tib.L.Sukh, 142.9–144.3）にのみ，いわゆる「必至滅度の願の成就文」の後に，再度，「Sukhāvatī の所以」の記述が現れる．残りの諸本に目を向けると，『無量寿経』（T.12, 272b5–7）・『如来会』（T.11, 97c16–19）・『荘厳経』（T.12, 323a22–26）には，かかる成就文はあるが，「Sukhāvatī の所以」はなく，他方，『大阿弥陀経』と『平等覚経』には，かかる成就文も「Sukhāvatī の所以」もない．

2．3．聞信偈　梵本と蔵訳には，「必至滅度の願の成就文」，そして「Sukhāvatī の所以」の記述に続き，偈頌（聞信偈）が置かれている．「聞信偈」は梵本（L.Sukh, 46.4–47.10）と蔵訳（Tib.L.Sukh, 144.3–146.5）の２本にのみ見られ，他の諸本には見られない．その趣旨は，Sukhāvatī に対する讃嘆，さらには，その名を聞くだけで計り知れない福徳が得られる，というものである．

3．結語

〈無量寿経〉諸本に見られる阿弥陀仏の国土を指し示す名称，および各本の Sukhāvatī に関する記述を中心とし，阿弥陀仏国土観の変遷についての考察を試みた．その結果，以下のことが確認できる．

①〈無量寿経〉の初期から後期への展開において，阿弥陀仏の国土を指し示す名称として，Sukhāvatī に関する語の使用が次第に増加している．

②『大阿弥陀経』にて，唯一 Sukhāvatī の用例が確認される「現在西方」の箇所は，後代になると，再編成され，問答形式となり，独立したトピックとして置かれる．

③初期２本には見られない国土に関する記述が後代に付加され，さらに「Sukhāvatī の所以」も挿入されている．

④梵本・蔵訳には，Sukhāvatī の讃嘆・福徳を内容とする「聞信偈」が現れる．

これら４点より，〈無量寿経〉における阿弥陀仏国土観の変遷として次のことが考えられる．〈無量寿経〉成立当初，阿弥陀仏の国土の名称は“Sukhāvatī”であったが，かの仏国土はもっぱら「阿弥陀仏の国土」と把握されていた．それが後代になるにつれて，Sukhāvatī と呼ばれる所以，Sukhāvatī に関する偈頌が増設され，「阿弥陀仏の国土＝Sukhāvatī」という意識が定着するにいたった．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1）〈無量寿経〉は，梵本，蔵訳，漢訳の『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』，『無量清淨平等覺經』，『無量壽經』，「無量壽如來會」（『大寶積經』巻17・巻18），『大乘無量壽莊嚴經』（以下，漢訳5本を順に，『大阿弥陀経』，『平等覚経』，『無量寿経』，『如来会』，『荘厳経』とする）のもとになった種々の原本を総称する経名として用いる．これら諸本は，『大阿弥陀経』→『平等覚経』→『無量寿経』→『如来会』→梵本・蔵訳（・『荘厳経』）の順で成立したと考えられる（cf. 藤田 2007: 87–90）．　2）藤田 1970: 440–463, 2007: 355–367; 香川 1993: 176–194.　3）buddhakṣetra およびその派生語，そして，それらの訳語の総称である．　4）Sukhāvatī およびその派生語，そして，それらの訳語の総称である．　5）辛嶋 2010: 33–34; cf. 藤田 1970: 432–433.　6）T.12, 288b25, c6, c9.　7）『無量寿経』: T.12, 270a4–7;『如来会』: T.11, 95c15–17;『荘厳経』: T.12, 321c11–16; 蔵訳: Tib.L.Sukh, 94.4–95.5.　8）Cf. 香川 1984: 188–189.　9）『荘厳経』（T.12, 322c15–24）には，音声に関する記述は見られるが，「Sukhāvatī の所以」については説かれていない．

〈参考文献および略号〉

L.Sukh: *Sukhāvatīvyūha* [Larger]（藤田宏達校訂，『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』所収，京都: 法蔵館，2011, pp. 1–80）．**T**: 高楠順次郎・渡邊海旭都監，『大正新脩大蔵経』，東京: 大正新脩大蔵経刊行会，1924–1934．**Tib.L.Sukh**: *'phags pa 'od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*（佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編，『蔵訳無量寿経異本校合表（稿本）』所収，京都: 佛教大学総合研究所，1999）．

藤田宏達 1970:『原始浄土思想の研究』，東京: 岩波書店; **2007**:『浄土三部経の研究』，東京: 岩波書店．**香川孝雄 1984**:『無量寿経の諸本対照研究』，京都: 永田文昌堂; **1993**:『浄土教の成立史的研究』，東京: 山喜房佛書林．**辛嶋静志 2010**:「阿弥陀浄土の原風景」，『佛教大学総合研究所紀要』17, pp. 15–44.

〈キーワード〉　無量寿経，仏国土，極楽，buddhakṣetra，Sukhāvatī

（龍谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service